

アリソン・マシューズ・デーヴィッド著
『死を招くファッション——服飾と
テクノロジーの危険な関係』

安部恵子訳、化学同人、
2021年刊（2019年第1版）
240頁、3500円+税

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

思わずディズニーランドのホーンテッドマン
ションの光景が頭をよぎったのは、青いド
レスを身にまとった骸骨が、何かにとりつか
れたかのように、微笑みを浮かべながら、踊っ
ていたからだ。

『ドレス・ア・ラ・結核、うぬぼれ嬢の工
場から（Dress a la Tuberculosis, from the
workshops of Miss Vanity）』（1830）と題
された、この表紙の風刺画は、当時、結核を
はじめとする感染症がエロチックなファッ
ションに起因すると非難され、服装が健康を
害するおそれがあると、理解され始めた社会
状況を表しているらしい。豊富なカラーの写
真と図とともに本書でつづられるのは、19
世紀から20世紀前半の北米と英仏を中心と
する、ファッションによる犠牲者の歴史だ。
それ以前の批判は、ファッションは貪欲、自
尊心、虚栄心、肉体的享楽と結びつき、キリ
スト教の規範にそぐわないとする道徳的な観
点からなされていたが、19世紀からは医学
的な危険性が指摘されるようになった。たと
えば、ファッション性を追求するあまり物理
的な安全性が軽視されたり、原材料に思いが
けず身体に有害な化学成分が含まれていたり、
といった具合である。本稿では各章の紹介
をした後に、本書の意義と批評を加える。
目次は以下の通りである。

序論 現実でも物語でもファッションは死
を招いている

第1章 病んだ衣服

——細菌や寄生虫との戦い

第2章 毒を含んだ技術

——水銀入りの帽子

第3章 毒を持つ色素——ヒ素を含む緑

第4章 色——死をもたらし美しい色たち

第5章 絡まる、窒息する

——機械に巻き込まれる事故

第6章 炎に包まれる生地——燃え上がる

チュチュと可燃性ペチコート

第7章 爆発するまがい物

——セルロイドの櫛と人工シルク

結論 ファッションによる犠牲者を出さない
未来へ

序論では、本書の全体像が現代につながる
形で示される。本書が対象とする時代には、
製造した人々と身に着けた人々の両方が、
ファッションナブルな衣類によって、健康
被害を受ける可能性を孕んでいた。著者がと
くに強調しているのが、女性が安全性を軽視
したファッションを欲すると咎められたのに
対し、そのような衣服を製造し、女性にその
ような服装を求める風潮を創り出した男性は
見過ごされてきたという、社会におけるジェ
ンダーバイアスである。男性の衣服や履き物
には機能性と安全性に重点が置かれる一方
で、女性の場合はファッション性が重要とさ
れた。たとえば、転倒の危険があるハイヒ
ールや厚底靴、巻き込まれやすい長いマフ
ラー、燃えやすいロング丈の木綿のスカート
（ジブシースカート）である。ジェンダー
バイアスは、本文の中でも力点が置かれて
いる主張である。

第1章では衣服による伝染病の拡散に焦
点があてられる。イギリス人がアメリカの先
住民に「天然痘毛布」を渡したことは知ら
れているが、衣服を通した伝染病の拡散は
ヨーロッパでも生じていた。19世紀後半、
富裕層が購入する衣類は、貧困層が劣悪な
環境の工場で生産し、洗濯していたため、
社会の各層に伝染病が広がった。1860
年代、ルイ・

パストールらが病気の原因として微生物を示唆して以来、衛生を保つため、衣類をしっかりと洗濯するようになった。20世紀初頭に女性のスカート丈が短くなった要因の1つも、スカートの裾が路上の排泄物などで汚染されることを防ぐためであった。

第2～4章の焦点は化学物質の毒性であり、第2章では帽子作りに使われた水銀がもたらした健康被害が取り上げられる。上流階級の男性にとって不可欠なアイテムだった帽子はビーバーの毛を原料としていたが、18世紀以降はウサギの毛を使うようになった。しかしウサギの毛は硬く、加工する過程で水銀が必須だった。水銀は肺や皮膚から体内に入ると、痙攣、手足の振戦、麻痺などの症状を引き起こすし、工場外に放出されると、環境が汚染され、近隣の住人の健康が害されることもある。水銀の危険性を指摘した医師もいたが、水銀は安価であったため、使用は続いた。1960年代に中止されたが、それは帽子を着用する人の減少という社会状況の変化が理由だった。なお、仕上げの段階で表面にニスを塗っていたため、帽子の着用者には明らかな水銀による健康被害は見られなかったらしい。

第3章では緑色の染料として使われた砒素による中毒を扱う。19世紀から使われるようになった化学染料の1つに砒素がある。その原料となる亜砒酸は、銅や錫、コバルトの採掘や精錬の副産物として得られ、安価であった。1778年、スウェーデンの化学者が亜砒酸銅を発明し、若草色の染料が誕生した。1814年にはドイツの化学者がアセト亜砒酸銅を合成し、エメラルドグリーン色の染料が生まれた。産業革命によって都市から色が失われていった19世紀、「自然」を求めた人々により緑色の人気が高まり、壁紙にも緑色が好まれた。また女性らしさと自然が関連づけられたことで、女性たちは緑色のドレスや靴、造花の花冠を身につけるようになった。しかしながら砒素は、皮膚を通して、あるいはそ

の粉を吸い込むことで、皮膚炎や癌を引き起こす。着用した女性たちや造花作りに携わっていた労働者たちは深刻な症状に悩まされることとなった。1860年代後半までには、緑色の染料は鉍物を主体とする青緑色の染料に置き換わったが、その背景には、社会が声をあげたことだけではなく、色そのものが見分けやすかったこと、着用者に明らかな影響が見られたことがある。

第4章ではアニリン染料がもたらした健康被害が説明される。19世紀は安価で鮮やかだが、強い毒性をもつ化学合成染料がいくつも発明された時代だ。アニリン染料の原料は、石炭ガスの使用に伴って大量に発生するコールタールに含まれるベンゼンであり、モーブ（紫）、フクシン（赤紫）、マジエンタ（深紅色）といった染料が作られた。このような染料は広く使われたが、直接肌に触れる靴下の被害が深刻だった。汗の成分のpHバランスがアルカリ性に傾いている少数の人々に痛みを伴う発疹が現れたのである。ニトロベンゼンはアニリン合成過程で豊富に生じる安い化学物質で、ドライクリーニングや黒い染料の溶剤として用いられていた。靴墨にも含まれ、靴磨きや靴の染め直しに使用されたが、蒸発した気体を吸い込み、亡くなった人もいた。20世紀初頭までには、チアノーゼ、貧血、皮膚炎、呼吸器疾患といったアニリン中毒は知られていなかったらしい。ただし1920年代から毛髪染料に使用されているアニリン染料の1つ、パラフェニレンジアミン(PPD)は、深刻なアレルギー反応を起こすことがわかっているが、今でも99%の毛髪染料に使用されている。また、本書に記述はないが、アニリン染料は今でも革製品の仕上げに用いられているようだ。

第5～7章の焦点は、新しい産業技術と大衆化された贅沢品が原因で発生した事故や労働災害である。まず第5章では布地などの絡みや動きが制限された衣服による事故を取り上げている。前者の代表は、長い

ショールが車の車軸に巻きつき、首が絞められ、死亡したダンサーのイサドラ・ダンカン(1877-1927)であろうが、女性の長い髪や衣服、アクセサリー、男性のネクタイやシャツの袖口が引っかかり、工場内の機械に巻き込まれるという事故はしばしば生じていた。後者には、1910-14年頃に流行したホブルスカートがある。下部の布を膝に巻きつけることで、膝からくるぶしまでの動きが制限され、歩みにくいスカートを指すのだが、路面電車やタクシーの乗降の際に転倒したり、火災時に逃げ遅れたりする着用者が出ていた。動きを抑制したり、一部が極端に大きく扱いくかたりするファッションには、とくに女性の社会的地位、嗜好、財産が示されている。

続く第6章は服の可燃性である。近代まで明かりは炎であったため、服に火が燃え移り焼死する事故は、現代よりはるかに多かった。たとえば、イブニングドレスの材料だった薄いモスリン織の白い綿生地や機械編みのレースのボビネット、バレリーナのチュチュである。布地を難燃性にする技術が開発されても、布地が黄ばみ、ゴワゴワすることを嫌い、拒否したダンサーもいたようだ。クリノリンという鳥かご状の鉄製のペチコートは1856年から60年代後半にかけて、あらゆる社会階層の女性たちが着用した。スカートに火が着くと、クリノリンが送気管の役割を果たし、燃え上がりやすく、1860年代からは小型化した。耐火性の衣類の開発も行われたが、布を燃えにくくする洗濯糊は、洗濯の度に付着する必要があり、普及しなかった。繊維状の変成岩の総称であるアスベストは、現在では肺の組織を壊疽させる危険物質として知られるが、1830年代以降イタリアの消防士の間で使われ始め、塗料や布、建築材料に使われ、防火に役立っていた。錫酸ナトリウムの水溶液につけ、熱し、硫酸アンモニウムに通すという、錫化合物による難燃化は、布がより柔らかく、丈夫になったことから広

がった。研究開発した会社は無償で特許権を国に譲り、その技術が広がることで生地の安全性が確立されていったようだ。

第7章では、火薬の原料となるニトロセルロースから19世紀に生まれたセルロイド(人工プラスチック)とレーヨン(人工シルク)を取り上げている。セルロイドは象牙や亀甲などが入手しづらくなっていた19世紀頃から、それらの代替品として開発が始まった。ニトロセルロースと可塑剤となる樟腦を主原料とする合成樹脂で、世界初の高分子プラスチックである。しかし燃えやすいという性質を持ち、やけどをしたり、焼死したりする事故が起こっていた。レーヨンは真菌類がカイコガの卵に寄生して、ヨーロッパのカイコの幼虫が全滅したことをきっかけに開発された。初期のレーヨンはニトロセルロースの他、揮発性の有機溶媒を用いて製造していたため燃えやすかったが、1900年代初期までに不燃性の代替物に置き換えられた。このビスコース法で利用する二硫化炭素は製造に携わる労働者たちの中枢神経系にダメージを与えたものの、産業として大きく発展していたため、労働者への健康に配慮したうえで、現在でも製造は続いている。なお、本書に記述はないが、地球環境に配慮し、二硫化炭素を用いずに製造されたりヨセルも市場に出回っている。

結論では、今なお世界で続くファッションの危険性と問題が列挙されていく。放射性物質を含むベルトの鉾の製造責任を委託したイギリスの小売店ではなくインドの製造業者に負わせる状況、アスレチックシューズの組み立てに使われる神経毒性のある接着剤、2005年の服飾産業の輸入制限撤廃に伴う北半球の先進国の服飾産業の壊滅とファストファッションによる健康被害、ドライクリーニングに用いられているテトクロロエチレン、銀系抗菌剤による環境中の銀の増加、ポリ塩化ビニル(PVC)の製造に使われている水銀、生物毒素で銅に由来する染料のマラカ

イト（孔雀石）、デニムの加工に使う研磨剤のシリカによる肺の損傷、絡まりやすいため事故を誘発しやすいインド亜大陸の伝統的衣類、環境ホルモンとなるおそれがある臭素系難燃剤、Tシャツのスクリーン印刷に使われる環境ホルモンのノニルフェノールエトキシレート（NPE）やフタル酸エステル。最後にファッションによる犠牲者の出ない未来を願う言葉で締めくくられる。

本書の意義としては、第一に衣類に思いがけず潜む危険性に光を当てたことであろう。毒に注目した書籍は時々目にするが〔cf. 立木 1996; ハバート 2020; 船山 2008〕、本書の類書はないのではないか。第二の意義は、女性が犠牲者になりやすい社会的な状況や風潮があったこと、立場の弱い労働者にも視線を向けていることだろう。ファッションは個人の選択だと思われがちだが、とくに女性はファッションナブルであることを求める圧力がかけられていたことを指摘している点は、大きな功績である。またファッション産業を支える人々の被害も明らかにし、現在でも続いていることに警鐘を鳴らしている。その一方で、水銀と砒素の使用を中止するまでのスピードと背景を考えたとき、水銀は着用者に明らかな症状が出なかったが、砒素は出たということで、砒素の方が早く対応がなされている。このことから、労働者の状況というものは見えづらく、改善されにくいということに気づかされる。

読者をよく啓発してくれる良書であるが、各章で取り上げられているトピックについての帰結に関する記述が不足気味な箇所が散見される。また、人体に影響を及ぼす化学物質の説明や医学的な説明は明らかに不十分であり、評者は何度もインターネットで検索をしなければならなかった。著者の専門が元々の美術史で、その後人々とファッションの関係に関心を広げたという経歴からすると致し方ないのかもしれないが、もう少し丁寧な説明があると、より読みやすかったように思う。

私たちは現在が過去より安全な世の中になっていると思いがちだし、全体的に見れば、実際そうなのであろう。しかし本書を読んで痛感したのは、アスベストなど今の基準からすれば「危険」なファッションが、当初は良いものと考えられていたことである。未来の人々から見れば、現代人は冒頭で紹介した危なっかしげに踊る骸骨のように、危険な時代に生きているのだろう。骸骨は永遠に踊り続けているのかもしれない。

<参考文献>

- 立木鷹志 1996 『毒薬の博物誌』 青弓社。
 ハバート、ベン 2020 『毒と毒殺の歴史』 上原ゆうこ訳、原書房。
 船山信次 2008 『毒と薬の世界史——ソクラテス、錬金術、ドーピング』 中公新書。

ブリュノ・ラトゥール著 『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』

伊藤嘉高訳、法政大学出版局、2019年刊
577頁、5400円＋税

国際ファッション専門職大学
高橋幸治

500ページを優に超える大著である。しかも、極めて難解である。本書はフランスの人類学者、社会学者であるブリュノ・ラトゥールが2005年に上梓した *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-network-theory* の待望の日本語訳であり、アクターネットワーク理論についての解説書だが、邦題の「入門」という言葉を初心者向けとか、平易とか、取っ付きやすいとかいう意味に解して手を出すと間違いなく後悔することになるだろう。本書を読破するには相当な根気と忍耐が必要である。では、なぜ、入門（英題では「introduction」）という紛らわしいサブタイトルが冠せられているのかといえば、